



“成りきりバンド”の世界によろこそ！

「魅せる・乗せる・笑わせる？」VON HALEN LIVE！

米国のハードロックバンド「VAN HALEN（ヴァン・ヘイレン）」の“成りきりバンド”「VON HALEN（ボン・ヘイレン）」がLIVEを行った。

コロナの影響によるLIVE活動自粛に加え、メンバーの死去もあって、昨年8月にオンライン中心で行った追悼LIVE以来、1年ぶり、観客をフルに入れてのLIVEは数年ぶりとなる。

“成りきりバンド”とは、いわゆる“コピーバンド”のことで、その名称のごとく、有名なバンドの楽曲を複製し演奏するバンドを言うが、私の中では、対象となるバンドに対して単なるコピーの枠を超えた愛情と敬意を感じることから、あえて“成りきりバンド”という名称を使わせていただく。



特に、ボン・ヘイレンは、超人的なテクニックを持つギターリスト、“エディ”こと、エドワード・ヴァン・ヘイレン（故人・2020年10月6日死去）を擁するヴァン・ヘイレンの“成りきりバンド”だけに、オーディエンスの眼も当然厳しくなる。その中で、

約30年間活動を続けてきた（1992年結成）のだから、その実力はもはや疑いの余地がない。

さらに本家本元のエディが亡くなってしまった今となつては、いまはもう観ることのできないバンドへの思いも託されているといったら、大げさだろうか。少なくとも、ボン・ヘイレンの登場をいまいかきまかと待つ観客、そして、オープニングでの歓声、その後の盛り上がりを見れば、それが決して大げさではないということを実感させられた。

そんなボン・ヘイレンの最大の魅力といえば、ギターのエ.D.（え〜で〜）・ボン・ヘイレンのいうまでもない本家エディばりの卓越したテクニックとボーカルのでぶっちょ・リー・ロスの本家デビット・リー・ロスを超えたエンターテインメント性とのケミが生み出す「魅せる・乗せる・笑わせる？」の世界だ。（もちろん、それを支えるリズム隊の役割は重大だ）

この日も、そんなボン・ヘイレン・ワールドが炸裂。このご時世ご法度である大声で笑うことを我慢するのが大変だった（と一応書いておく）。“成りきりバンド”の世界。そこには若き時代の憧れと哀愁があるのかもしれない。いずれにしても、私の世代にとってはたまらない貴重な時間であったことは確かだ。



経済界倶楽部例会報告

経済界倶楽部東京9月例会が9月12日に開催されました。

講師は音楽家の小室哲哉さん。テーマは「メタバースにおける音楽の在り方〜リアルでの音楽体験が今後どう生き残るのか〜」でした。

音楽（楽曲）には原盤があり、それをコピーすることでビジネスが成り立ってきました。

レコード盤、CDから配信に、価格も単価から聞き放題（サブスク）になるなど、音楽の楽しみ方も時代の

流れによって変化してきました。しかしながら、これらの流れの中で、自分たち音楽家が作った楽曲がお水の値段よりも安くなってしまった。

小室さんはこうした音楽作品におけるコピー文化への限界を感じ始めていたといいます。

そんな状況に中で登場してきたのがメタバースです。

メタバースによって、楽曲の原盤は唯一無二のものとなりその価値が見直されるようになります。また時

にはコレクターの収集対象になることも考えられます。

それを理解した上でどうなっていくのか。

小室さんは、神格化と大衆（没入）化。このふたつが同時に起こってこなければ、このテクノロジーは普及していかないと話していました。

神格化と大衆化。言い換えれば、コレクション化していく一方で、いっしょに何か（体験）をする（例えば、小室さんのスタジオでいっしょに楽曲を制作する）ことなどを指します。

メタバースの可能性を話し始めたらキリがありません。

ただ、ひとついえることは、イン

ターネットが想像を超えた速さで普及したことを考えると、メタバースが私たち生活の中で当たり前テクノロジーとして取り入れられるようになるのも、そんな遠い先の未来のことではないかもしれないということです。

そして、これが音楽や芸術といったエンターテインメントを介したことで、金融ではできなかった加速がなされる。これは過去の歴史、ビデオデッキの普及を見れば想像に難くはないでしょう。

その変化を私たちが受け入れる中で、人間としてどう生きていくか。それが一番大切だと感じました。

編集後記

今回取り上げた“成りきりバンド”VON HALENのVo.とG.は、昔のバンド仲間だったりします。彼らは様々な変化をしながらも音楽活動をずっと続けてきました。まさに“継続は力なり”ですね。

記事には書きませんでした。小室哲哉さんは「エンターテインメントの重要性は思わず声が出てしまう（何か無意識にご五感に響くことを表現してしまう）ことにある」といっていました。

そして、ボルテックスは事業継続。今回は、継続とファイブKの世界で通信をまとめてみました。

加藤佳悟

FKP
INFO

ボルテックス

「区分所有オフィス」のハイクオリティビル『VORT東日本橋Ⅱ（仮称）』

「区分所有オフィス」を活用した企業価値・事業継続性向上を。

「区分所有オフィス®」を主軸に資産形成コンサルティングを行うボルテックスが、東日本橋にオフィス・店舗ビル『VORT東日本橋Ⅱ（仮称）』を取得した。

ボルテックスは、これまでも希少性のある都心エリアのオフィス・商業ビルを中心とした物件を取得してきた。同物件は、同社のハイクオリティ・ブランド「VORT®」155棟目になる。

東日本橋周辺は、古くから問屋街として発展し、今でも多くの商社および店舗が軒を連ねているエリアだ。都内有数のビジネスエリアとして発展を続ける「東京」・「丸ノ内」・「大手町」へのアクセスも良いことから、中規模オフィスが複数誕生しているオフィス需要も見込まれている。

同物件は、8戸からなるオフィス・店舗ビルで、1階とM1階は店舗フロア、2階から7階は事務所フロアになっている。2017年から2018年にかけて大規模修繕工事を実施している。アクセスは、都営新宿線「馬喰横山駅」、都営浅草線「東日本橋駅」から徒歩3分。ほかにもJR総武線快速、東京メトロ日比谷線など複数路線が利用可能と利便性が高い。今後、リーシングを開始、同時に各フロアは「区分所有オフィス」として販売される。

